

松本市文化財調査報告 No.52

松本市宮瀨本村遺跡Ⅱ

——緊急発掘調査報告書——

(遺構編)

1987・3

松本市教育委員会

松本市宮泷本村遺跡Ⅱ

——緊急発掘調査報告書——

(遺構編)

1987・3

松本市教育委員会

序

宮岡本村遺跡は古くより弥生時代の遺物を出土している場所として知られており、特に塩尻市栄宮で完形の銅鐸が発見されるまでは、信州で唯一の銅鐸片を出土した遺跡であり、考古学者の注目の地でもありました。

この地は昭和45年、水道局による配水管敷設工事に際し、藤沢宗平先生らによって発掘調査され、弥生時代の集石を検出しておりますが、それに接して、下水道処理場の拡張工事が行われることとなり、下水道部と連繫をとりながら、昨年に引き続き、第2次の発掘調査を行いました。

調査は6月初めより8月9日まで2ヶ月の長きにわたり、多くの方々のご協力により完了できました。その結果、弥生時代住居址21軒、古墳時代住居址2軒、古墳1基など数多くの遺構を検出し、また夥しい土器の出土をみました。本年度は昨年同様それらのうち、遺構のみをまとめましたが、まだ周辺地域の調査が予定されておりますので、遺物については全体の調査終了時に報告書としてまとめたいと思っております。

本調査は酷暑の時期もあり、調査員、作業員の方々には大変ご苦勞をいただきました。記して感謝申し上げます。また周辺町会の方々にも何かとご迷惑をおかけいたしました。これまた文化財保護にご協力いただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

本書が歴史解明に少しでもお役に立てば幸いです。

昭和62年3月

松本市教育委員会

教育長 中 島 俊 彦

例 言

- 1、本書は昭和61年6月9日より8月9日にわたって実施された松本市宮渕本村に所在する宮渕本村遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。
- 2、今回は遺構のみの報告であり、遺物については別の機会に報告したい。
- 3、本調査は松本市公共下水道事業宮渕浄化センター拡張（汚泥処理施設）工事に伴うもので、松本市教育委員会が行ったものである。
- 4、本書執筆は、第1章事務局、第2章第2節1、木下守、三村竜一、藤田英博、2、三村竜一、3、藤田英博、4、竹原学、5、木下守、その他の項目は直井雅尚が担当した。
- 5、本書作成にあたっての作業の責任は次のとおりである。
遺構図整理 古墳：竹原学 その他：直井雅尚
企画 直井雅尚
編集 神沢昌二郎、滝沢智恵子
- 6、出土遺物及び遺構測量図類は松本市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査経過	3
第1節 調査に至る経過	3
第2節 調査体制	3
第2章 調査結果	5
第1節 調査の概要	5
第2節 遺構	6
1. 住居址	6
第21号住居址	6
第22号住居址	7
第36号住居址	8
第39号住居址	9
第40・46号住居址	10
第45号住居址	11
第47号住居址	12
第48号住居址	13
第50号住居址	14
第51号住居址	15
第52・62号住居址	16
第53号住居址	17
第54号住居址	18
第55号住居址	19
第56号住居址	20
第57号住居址	21
第58号住居址	22
第59・63号住居址	23
第60号住居址	24
第61号住居址	25
第64号住居址	26
第65号住居址	27
第66号住居址	28
2. 土壇	30
3. 方形周溝墓	34
4. 古墳	36
5. 谷状地形	41
第3章 調査のまとめ	45
付図・全体図	



1:25,000



第1回 調査地の位置

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

宮沢本村遺跡は、松本市宮沢本村に所在し、従来、宮沢遺跡あるいは宮沢二ツ塚遺跡として、縄文時代から平安時代にかけての遺物が出土することで知られてきた。また銅鐸の紐の一部を出土したことで古くから注目されていたところであった。

ところがこの遺跡の北部一帯に松本市が松本市公共下水道事業宮沢浄化センター拡張（汚泥処理施設）工事を行うことになったため、当該地内の遺跡が破壊されるおそれが生じた。そこで関係部局で保護の協議を重ねた結果、緊急発掘調査が行われたのであるが、今年度はこれにひき続き、前回未買収等の理由で調査できなかった部分について第二次調査を実施することになったものである。

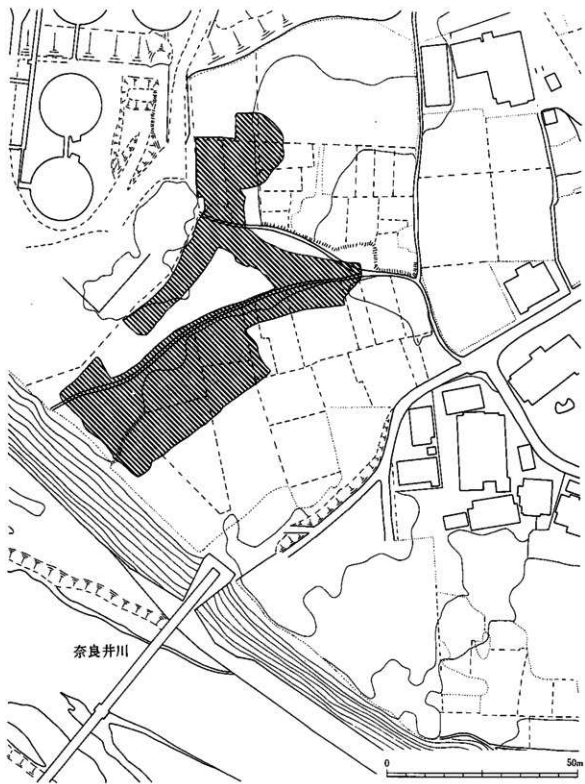
第2節 調査体制

団 長：中島俊彦（教育長） 担当者：神澤昌二郎（市立考古博物館長）

調査員：太田守夫 竹原学 三村竜一

協力者：会田久子 青柳祥子 赤羽包子 味木祐美 天野智広 飯沼昌宏 五十嵐周子 石松清美 伊丹早苗 稲垣博子 今井修 大石英 大出六郎 大谷成嘉 大塚装六 大戸英男 奥河建一 川上靖枝 小池直人 神戸巖 小松弘 小松正子 小松量子 酒井文雄 佐々木謙司 佐藤学 塩原久和 清水滋 瀬川長広 田尻健治 土橋幸子 土屋君子 鶴川登 土肥泰子 直井スガ子 中島新嗣 中村浩太郎 西川卓志 林昭雄 原大志 藤井修亮 藤田英博 藤本嘉平 穂刈松子 松本建速 丸山恵子 行武瑞穂 鷺三智子

事務局：萩原博（下水道課長） 山田栄二（同課長補佐） 千野満穂（同主事） 浜恵幸（社会教育課長） 岩淵世紀（文化係長） 熊谷康治（同主事） 直井雅尚（同主事） 木下守（同嘱託）



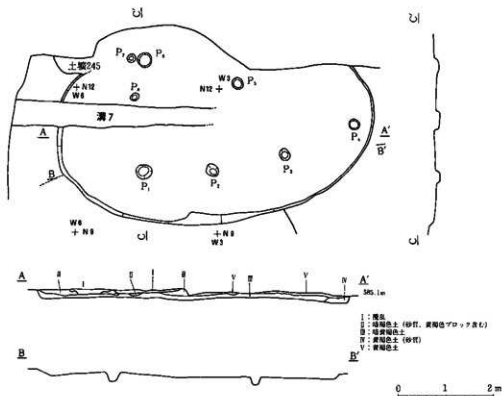
第2図 調査地の範囲

第2章 調査結果

第1節 調査の概要

第2次調査である今回は、昨年度末調査だった2枚の畑地と、耕土を置いたため調査できなかった部分を対象とし、調査はまず重機によって耕作土を除去した後、人力で遺構検出作業を行い、確認した遺構は順次命名、掘り下げを行った。これに平行して、第1次調査と同様に調査地を3×3mの方眼で覆い、遺構のオフセット測量を進めた。この際の、測量用基準線や住居址の名称番号等は第1次調査のものを踏襲した。土壌については201から番号を付した。最終的な調査面積は約1270m²に及ぶ。これにより第1次調査の際に設定した約8400m²にのぼるⅠ～Ⅲ区の調査範囲内は、ほぼ余す所なく調査したことになる。約6300m²にのぼる。

- 調査の内容では、第1次調査同様、弥生時代を主とする多数の遺構とそれらに伴う遺物が発見された。遺構の種類は、竪穴住居址、土塼、方形周溝墓、古墳がある。竪穴住居址は新たに21軒が検出され、また第1次調査で部分的に調査された5軒の残りの部分も確認、調査することができた。ただし第49号住居址は命名後に住居とは認められなくなり空番とした。また昨年命名した第23号住居址も同じく空番となった。これらの竪穴住居址は、2軒が古墳時代後期のものである他は、弥生時代中期後半～後期にかけてのものと思われる。平面形については全形を残しているものが少ないが、隅丸長方形または隅円形を呈している。次に土塼は大小各種のものが各所から検出されているが、良好な遺物を出土したものがなく、時期の決定が困難な例が多い。方形周溝墓は第1次調査で
- 04 その一部を「溝1」として捉えて報告したもので、かなり不整だが方形を呈し、東辺の中央にブリッジをもつ。溝中の遺物や他遺構との重複からみて古墳時代前期のものと考えられる。古墳は、第1次調査で、削平されている墳丘内の墓塼の大部分と周溝の東半分を調査したもののだが、今回は残りの西半分を対象とした。この結果直径18mの円墳であることが判明した。また西側の周溝内にも、昨年東側の周溝と同様、埋葬施設が発見された。この他今回の調査地の南端部（昨年調査のⅠ区
- ・北隣にあたる）に、巾10m以上の大きな谷状の地形が確認された。部分的な調査しかできなかったが東北東から西南西（あるいはその逆）に向って走っており、底面の傾斜は緩やかで、覆土は黒色土が埋っていた。また覆土中層に拳大から人頭大の礫が群集して存在しており、その周辺から多量の弥生土器片が出土した。遺物は竪穴住居址内と古墳周溝内、谷状地形部分から多量の弥生土器や若干の土師器や須恵器・石器の出土をみた。注目されるのは第48号住居址からの一括遺物で、焼失
- 05 住居の床上から各3個体分の壺と甕、大形の磁石、研磨しかけの太型蛤刃石斧、石包丁、磨製石鎌、片刃石斧、細型管玉等が発見された。この他古墳周溝から剣型石製品や鉾が出土している。



第3図 第21号住居址

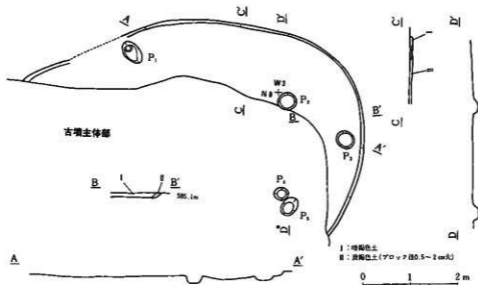
第2節 遺構

1. 住居址

第21号住居址

調査区域の北端、22住の北に位置する竪穴住居址である。主軸をN-83°-Eにとり、規模は東西6.6mである。プランは、楕円形を呈すると思われる。本址は、22住、溝7、土壇245に切れ、南半分は、古墳墳丘下であり、主体部に切られている。覆土は暗褐色土～黄褐色土が約20cmの厚さで堆積しているのが観察され、壁高は約20cmを測る。壁は60°ぐらいの角度で立ち上がる。床は砂層の上に構築されたためか、軟弱であり、ほぼ平坦である。ピットはP₁～P₆が検出された。支柱穴はP₁、(P₂)、P₃、P₄と思われ、6本柱と推定されるが、深さの点に問題がある。支柱穴、炉址等については確認できなかった。

遺物は、少量しか出土しなかったが、本址の時期は、弥生時代中期末と考えられる。



第4図 第22号住居址

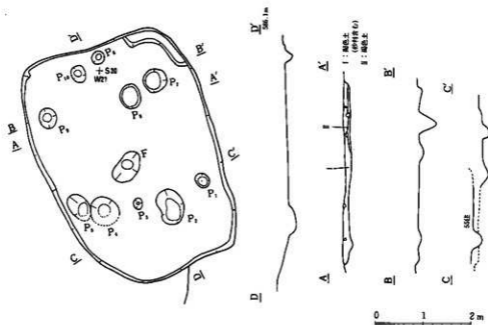
第22号住居址

本址は、調査区域の北端にあり、21住の南に位置する住居址である。他の遺構との関係は、21住を切っている。住居址は古墳墳丘下に存在し、古墳の主体部に切られている。主軸は、N-75°-Eをとり、規模は、長径8m前後と推定される。プランは、楕円形を呈するものと思われるが、正確には知りえない。

壁高は10cm弱で、壁は基底部を残すのみである。東側では、比較的よく確認できたが、南側では不明瞭な部分があった。覆土は耕作による削平をうけているため、非常に浅いものとなっており約10cmの深さで暗褐色土～黄褐色土が堆積しているのが観察された。

床は小礫を多少含み、黄褐色の砂層の上に構築されているため、軟弱であった。床面は割合平坦である。ピットはP₁～P₅を確認することができた。主柱穴は、P₁・P₂・P₃を想定することができるが、いずれも10cm程度の深さしかなく、主柱穴とするには、少し疑問が残る。P₄・P₅は偶然にも墓壇下に残っていたものと考えられる。本址を4本柱とするなら、さらにもう1本、主柱穴がなければならないが、その想定される位置が古墳墓壇下にあったため、検出することができなかった。支柱穴、炉等については確認できなかった。

遺物は、少量で、紡錘車が住居址のほぼ中央で出土した。本址の時期は、弥生時代後期と推定される。



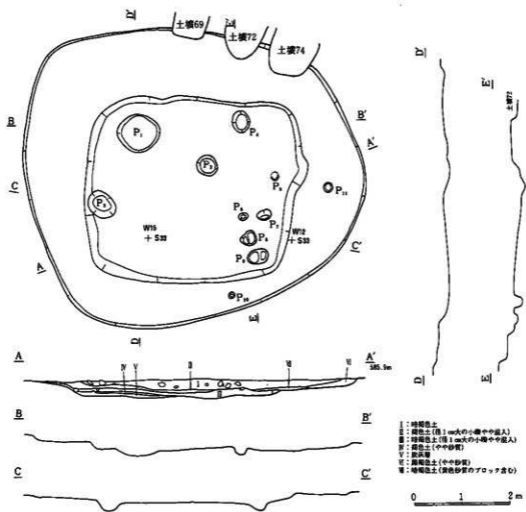
第5図 第36号住居址

第36号住居址

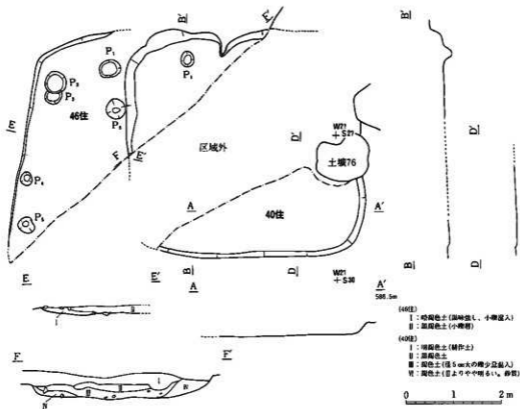
本址は調査区のはば中央に位置し、第55号住居址に貼られる。本址は昨年度の調査の際に5分の4程を調査しており、今回は全容を明らかにできたことに意義があろう。主軸方向はN-25°-Wを示し、規模は昨年の推定を若干上回る3.8×5.0mで、隅丸長方形を呈す。覆土は砂利を含む褐色土で、昨年度の様な大きな河原石はみられなかった。なお今回調査した範囲においてはビット等は検出されず、遺物も皆無である。本址の時期は昨年度調査報告のとおり弥生時代中期後半とする。

第39号住居址

前年度、調査したが今回は、残りの兩半分を調査した。本址は、調査区域のはば中央、第36号住居址の東に位置する。他の遺構との関係は、土壇69・72・74に切られている。主軸をN-80°-Eにとる。規模は、7.0×6.2mである。覆土は、深いところで40cmを測る。黒褐色土の中には、大量の礫が含まれていた。壁高は25cm程度で、立ち上がりは比較的なだらかである。壁際から内側に約1.3~0.4mの範囲で、約5cmの深さの落ち込みが、住居址の内側に、2重にしたように通っておりベッド状遺構と考えられる。柱穴はP₁~P₁₀まで検出されたが、主柱穴らしいものはなかった。床面は軟弱ではば水平である。炉址は、確認できなかった。今回、遺物は前年度調査に比べて、非常に少なかった。本址の時期は、弥生時代中期末~後期前半と推定している。



第6図 第39号住居址



第7図 第40・46号住居址

第40号住居址

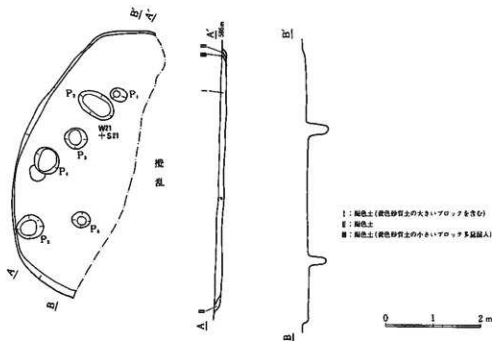
西側中央に位置する。昭和60年度に南側4分の1程が発掘調査されている。第41・46号住居址を切り、土壌76に切られている。主軸方向はN-0°、規模は4.9×4.7m、隅丸方形を呈す。床面は比較的良好であった。カマドは北壁中央に位置する。本址構築の際に壁の一部を袖として利用されている。中央部は未掘である。

遺物は少ない。高杯の脚部が出土した。他は小破片のみである。本址は遺物より古墳時代後期と推定される。

第46号住居址

西側中央に位置し、第40号住居址に切られる。壁はゆるやかに落ちる。床面は軟弱で、P₁~P₄があるが、不明である。本址は検出時住居址として扱えたが、疑問が残る。

遺物は土器片が僅かに出土しているのみである。時期は不明である。

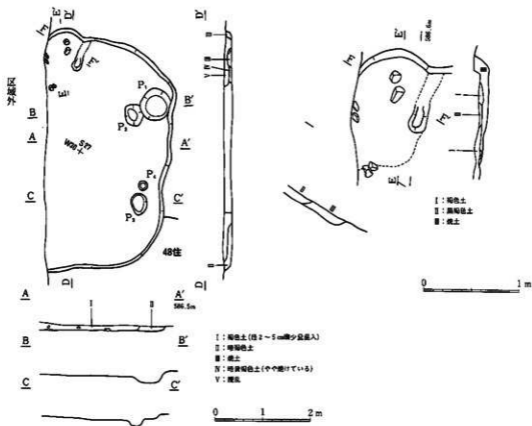


第8図 第45号住居址

第45号住居址

本址は調査区中央西側に位置し、北には第50号住居址がある。東側は捜乱のため西半を確認したにとどまる。主軸方向はN-15°-Eを示すと思われる。長軸は5.8mを測り他方は4 m程の楕円形を呈すものとする。検出面よりの深さは10cmと浅い。覆土は褐色を呈し、黄味を帯びた砂質ブロックを混じえる。壁高は低く、明確ではないが緩やかに立ち上がる。地山と同じ黄褐色土を床面としたが、覆土との明確な差はなく検出は困難であった。床面は水平でやや軟弱であった。ピットはP₁~P₆を検出し、P₁・P₆は主柱穴とした。P₁は28×36×48cm、P₆は34×40×38cmと深いが、柱痕は観察できなかった。またP₄は直径約54cmを測る円形で深さ15cm、脇に深さ10cm程の落ち込みがあり壺の下半部の出土をみた。炉は検出範囲内には確認していない。

遺物は壺1点のほかに土器数片が出土している。本址は遺物から、弥生時代中期後半に属する。

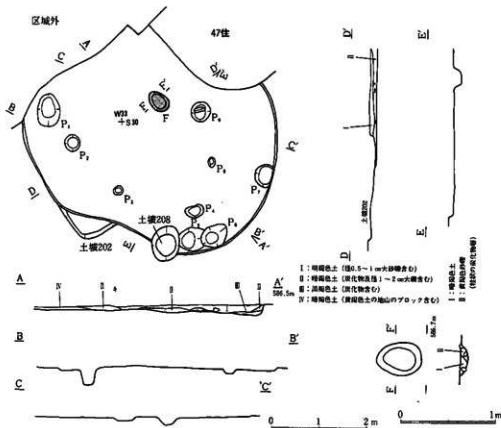


第9図 第47号住居址

第47号住居址

調査区西端中央に位置する。第48・49号住居址を切り、南東隅で第46号住居址と接している。北西半分は発掘区域外にかかる。プランは4.8×4.8mの隅丸方形で、黄褐色土中に掘り込まれている。主軸方向はN-55°-Wを示す。覆土は第1次堆積土として暗褐色土が流入したのち、2~5cmの礫を少量含む褐色土が堆積している。第48号住居址と切り合う南西壁は不明瞭であったが、なだらかに立ち上がっており、壁高は7~14cmを測る。床面はほぼ平坦で比較的良好な状態であった。主柱穴はP₁・P₂の2本が検出され、区域外に2本を想定し、4本柱の住居と考えられる。尚P₁は貯蔵穴と思われる。カマドは北東壁の中央にあり、北側は区域外にかかる。上部は擾乱により破壊され、東袖は先端部を残すのみである。カマド内には黄土と共に袖に利用されたとと思われる河原石が散乱していた。

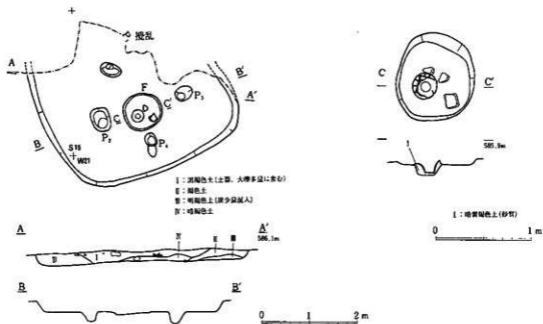
遺物は少なく土器器坏・須恵短頸壺がある。遺物よりみて古墳時代後期に属する。



第10図 第48号住居址

第48号住居址

調査区西端中央に位置し、北東部は発掘区域外である。第47号住居址・土壌208に切られる。主軸方向はN-75°-W、規模は5.4×4.5mを測り、楕円形を呈す。地山は黄褐色土である。覆土は炭化物と小礫を混入する明褐〜黒褐色土が堆積していた。壁は砂質の黄褐色土で小礫を含む。床面はゆるやかな起伏があり軟弱であった。主柱穴はP₂・P₃を除いて確認されなかった。P₁・P₄・P₅・P₆はその位置と形状から主柱穴とは思われない。炉は床面中央北寄りにある。50×35cmの楕円地床炉で、皿形に8cm程掘りこまれている。炉の覆土は砂質黄褐色土で粒状炭化物が多量に混入していた。本址は、床面から多量の炭化材が出土し焼失住居である。遺物は土器が床面中央で3個体、両辺部で1個体、北辺部で2個体まとまって出土した(壺・甕・高杯)。石器は、大型蛤刃石斧、偏平片刃石斧、未製品の石包丁・磨製石鏃、砥石5点以上が出土した。さらに、管玉(未製品)も出土した。とくに、砥石のすぐ脇で未製品の偏平片刃石斧が確認され、砥石の点数などからも石器を製作した住居址の可能性がある。本址の時期は弥生時代中期後半(栗林期)であるが、遺物が原位置を保っているだけにこの時期の貴重な資料となろう。

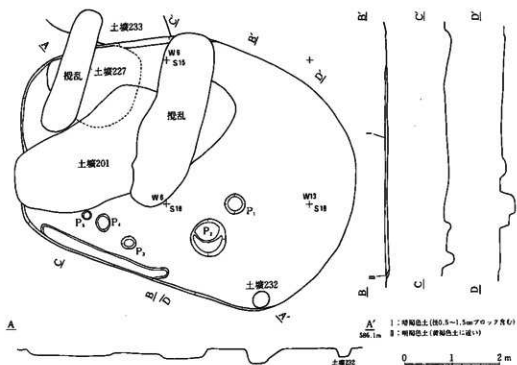


第11図 第50号住居址

第50号住居址

本址は、調査区域の西寄り、第53号住居址の南西に位置する竪穴住居址である。主軸をS-70°-Wにとり、南北4.0mを測る。プランは隅丸長方形を呈するものと思われるが、東半分は畑の耕作による擾乱をうけている。

壁高は20cmほどで、今回の調査で発掘された住居址の中で、壁面の残存状況が最も良い住居址の1つである。壁は、60°ぐらいの角度で立ち上がる。覆土は40cm程度で、黒褐色土中には、多量の拳大の礫が混入しており、それとともに多数の土器が床面より高い位置で出土した。これらの状況は自然の堆積とは思わず、人為的なものかもしれない。床面は礫が多少混じっていたが、割合平坦で、良好な状態で検出された。ピットはP₁~P₄が検出された。P₃とP₄が主柱穴と思われ、4本柱になると考えられる。伊は埋燗炉で、直径80cmの円形の浅いくぼみの中に、壺の口縁部を埋設していた。土器は少し被熱しており、口縁部は床面より5cm程高い。位置は主柱穴であるP₃とP₄の間である。本住居址からは中央西寄りのところで、壺の口縁と底部が床面より高い位置で出土している。本址の時期は、これから弥生時代後期と推定される。

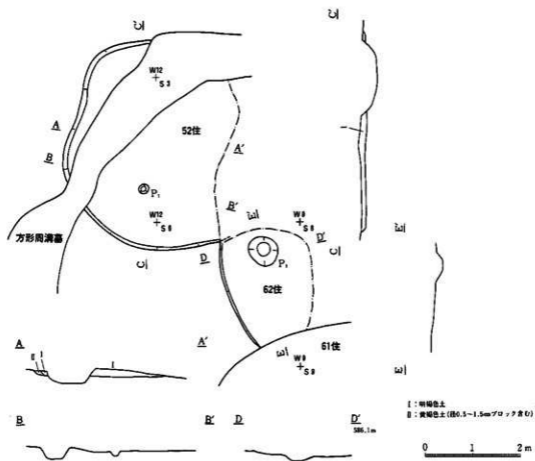


第12図 第51号住居址

第51号住居址

本址は調査区中央北寄りに位置する。農道直下にあたるため、周辺は耕作、あるいは廃棄物処理の穴により上部に擾乱を受ける。規模は7.2×5.1mで楕円形を呈し、N-75°-Wを示す。北西部を土壌227、南東部を土壌232に切られる。覆土は褐色を呈し、黄褐色ブロックを混じえる。壁高は低く、壁の立ち上がりは定かでない。床は礫質で遺存状況は劣悪である。ピットはP₁～P₅を検出したが、支柱穴となりうるものは確認できなかった。P₂は50×68×30cm、80×78×20cmの二段構造をもつ。P₂周辺には多量の緑色礫灰岩片がみられたが、加工施設は確認していない。また南壁際には幅26cm、長さ284cmにわたり周溝を確認した。

遺物としては紡錘車の他少量の土器片がみられた。これらの遺物より本址の時期は弥生時代中期末を与える。



第13図 第52・62号住居址

第52号住居址

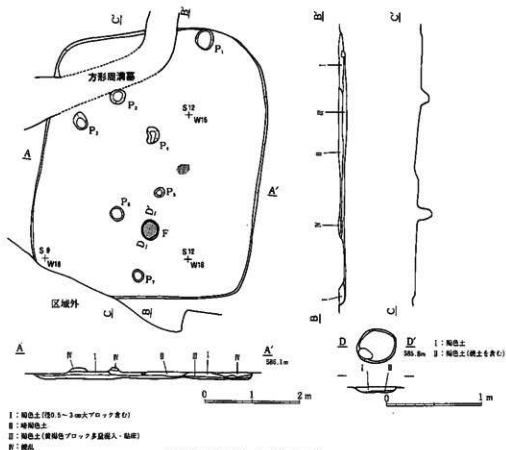
中央北寄りに位置し、方形周溝基に切られる。本址東部は削平されている。主軸方向はN-80°-E、規模は3.5以上×4.4m、楕円形を呈すると思われる。覆土は明黄褐色土である。壁高は最深部で17cmを計る。床面は平坦で良好な状態であった。P₁は本址に関わると考える。

南西隅から床面に接して高坏の脚部・完形の壺が出土した。遺物より弥生時代後期に属すると思われる。

第62号住居址

中央北寄りに位置し、第61号住居址に切られる。削平により床面プランの一部を確認するにとどまった。P₁は伊の可能性はある。

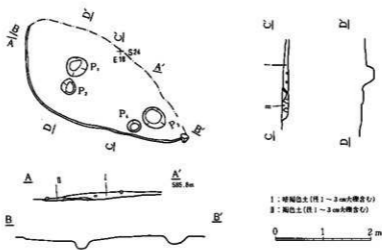
遺物は少なく、覆土・P₁より深鉢の破片が出土した。縄文時代中期後半に属する。



第14図 第53号住居址

第53号住居址

本址は、調査区域の西寄り、第50号住居址の北東に位置する住居址である。他の遺構との関係は方形周溝墓に北東部を破壊されている。主軸をN-85°-Eにとり、規模は、5.6×4.6mを測る。プランは、隅丸長方形を呈するが、北西隅は調査区域外である。覆土は10cm程度の厚さで、褐色土~暗褐色土が堆積していた。壁面は基底部を残すのみである。床面は砂層の上に構築されているため、粘質の黄褐色土をほぼ全面に貼り、堅緻な面をなす。柱穴は、P₁~P₇が検出された。主柱穴は、P₂とP₆を含めて、4本柱になると想定したが、残りの2本は、攪乱のため検出できなかった。P₃、P₅、P₇が支柱穴と思われる。炉は40×35cmの楕円形で、覆土は粘土を含んだ褐色土であった。位置は柱穴間よりさらに西壁側に寄ったところである。遺物は床面直上に壺と甕があった。時期は炉の位置、遺物等から弥生時代後期と考えられる。

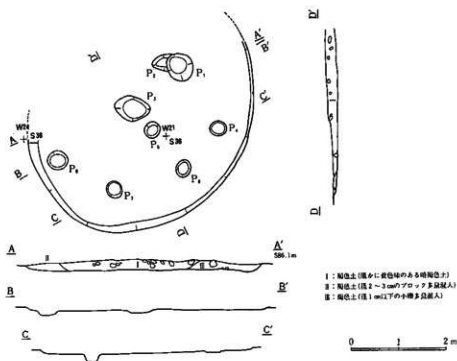


第15図 第54号住居址

第54号住居址

本址は調査区東突出部の黄褐色土中にその一部を検出した。北東部は農道直下にあたり雑草が茂っており、また調査区域外ともなるため全容を明らかにすることはできなかった。検出できたのは全体の4分の1程度で、あえてこの部分より推定すると、プランは隅丸長方形を呈すると思われる。覆土は褐色を呈し、中央部ではやや黒っぽい発色をみせている。一面に礫を混じえ、周辺にはやや大きなものも見られた。壁高は15cm程度で、立ち上がりは緩やかである。礫を混じえた黄褐色砂質土を床としたが不明瞭で、西へ緩やかな傾斜をみせる。ピットはP₁～P₅までを検出した。P₁は45×42×17cm、P₂は52×43×17cmで主柱穴とみなす。それぞれ3cm程度の深さのP₃、P₄を隣接するが、何らかの関係を指摘するには材料不足である。

遺物は極少量の土器片が出土した。本址の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

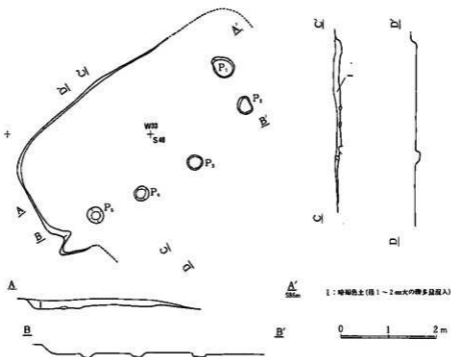


第16図 第55号住居址

第55号住居址

本址は調査区のはほぼ中央に位置し、北側が昨年度調査地域へと延びる。ここは農道の下部にあたり昨年度は検出することが出来なかった。北東には第36号住居址の一部を検出し、本址はこれを貼るものと推定される。規模は不明だが、長軸は6mを越えるものと思われる。検出できたのは南半部のみであるが、プランは楕円形を呈するものとする。検出面からの深さは最大でも20cmに満たず、覆土は褐色を呈する。また中央付近には多量の河原石が集中し、大きいものは10~30cm大のものまであった。壁の立ち上がりは明確ではないが、緩やかに立ち上がる様相をみせている。床は黄褐色を呈す砂礫質で、堅さもなく平坦である。ピットは8ヶを検出し、規模は33×37cm~52×76cmまで様々で深さはP₇を除きごく浅い。このうちP₁・P₄・P₆・P₇・P₈の5つは主柱穴の可能性があるが規模は一律でない。P₃は炉の可能性はあるが焼土・炭化物は全く見られなかった。

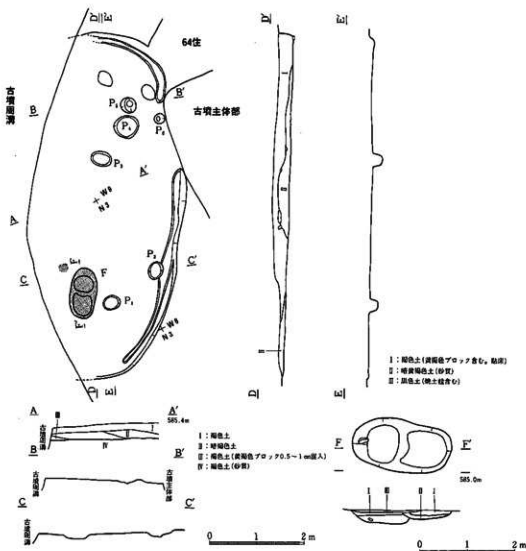
遺物は南部より石包丁と甕の出土をみた。本址には弥生時代中期末を与える。



第17図 第56号住居址

第56号住居址

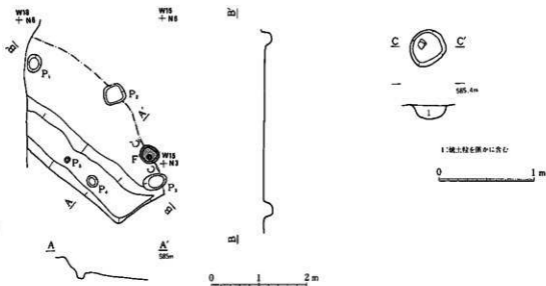
本址は調査区中央南西寄り、谷状地形の西に位置する。プランがはっきりせず、検出時に北東部をやや削りすぎてしまい、北西の一部を検出したにとどまる。推定ではあるが主軸を $N-55^{\circ}-E$ にとる隅丸長方形とする。長辺は6 m 前後と思われ、遺存状態は極めて悪い。地山は黄褐色土から東側は砂礫となる。覆土は暗黄褐色土で砂礫を多量に含む。壁高は北西隅において20cmを測り、立ち上がりは急である。床面は不明確だが軟弱な黄褐色土で、ほぼ水平と考える。ピットは $P_1 \sim P_3$ を検出したが北東部に位置する P_1 、 P_2 は不明確である。 $P_3 \sim P_3$ は $35 \times 32 \times 8$ cm 前後で、13cm、11cmの間隔をおく、なお北西部に若干の遺物を得たが本址の時期は不明である。



第18図 第57号住居址

第57号住居址

本址は、調査区域の北寄り、古墳の周溝内側に位置する竪穴住居址である。古墳周溝に切られているため、西南半分を失っている。主軸は、N-55°-Wをとる。規模は主軸方向で、7.3mを測り、プランは住居址の半分を欠いているため、正確には知りえないが、楕円形を呈すると思われる。壁は、西側の部分の残存状態がよく、垂直に近い角度で立ち上がる。壁高は約30cmである。覆土中の褐色土から、多くの遺物が出土した。床面はほぼ水平で、66住の上に構築されているため、その範囲に貼床がなされている。壁から約10cm内側のところに、周溝が廻っている。柱穴は計6本確認された。主柱穴はP₁とP₆が想定され、4本柱になる可能性が高い。炉は主軸方向上の東側、奥壁寄り



第19図 第58号住居址

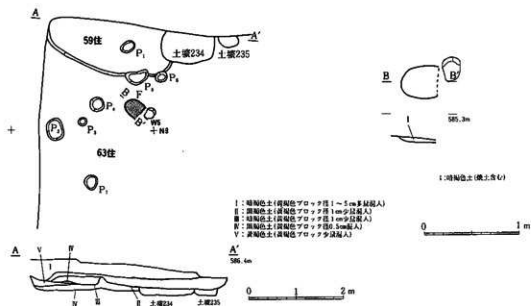
に存在し、覆土は焼土粒を含む黒色土である。柱穴間に位置するものと推定されるが、それにしては若干北に偏している。本址の平面プランは基本的に楕円形を考えているが、炉の位置からみてより細長い楕円形となる可能性もある。

遺物は、炉の周辺に集中していて、各種の土器が出土した。本址の時期は、弥生時代後期前半と推定される。

第58号住居址

調査地北に位置し、北西部は調査区域外となる。北東側では古墳周溝に切られている。したがって平面形は明らかではないが、北西—南東を長軸として4.0mを測る長方形プランを呈すると思われる。主軸方向はN-50°-Wを示す。黄褐色砂質土中に掘り込まれ、覆土は暗褐色土が堆積している。南西壁は北半分が区域外にかかっているが、壁高は24cmと高く、ややゆるやかに立ち上がっている。南東壁は北へ向かうに従って低くなっている。床面は平坦で比較的良好な状態で、壁・床面ともに黄褐色砂質土である。南西側壁に沿って、幅50～55cm、高さ10～15cmのベット状遺構があり、南隅で終わっている。北側は区域外にかかる為に不明である。本遺跡では第39号住居址にベット状遺構が検出されたが、プランに沿って一周している。ベットはP₁～P₅があるがこのうち主柱穴はP₅を除いて確認されなかった。P₄は28×22cmを測り平面楕円形を呈する。深さは20cm程である。炉は床面北東側の中央に位置する。直径40cmを測る平面円形の地床炉で、断面半円形に15cm程掘り込まれている。炉の覆土は焼土を僅かに含む暗褐色土である。尚、炉中には10cm大の焼石1個があった。北西に入口が想定される。

遺物は覆土～床面にかけて比較的多く見られた。本址は遺物より弥生時代後期に属する。



第20図 第59・63号住居址

第59号住居址

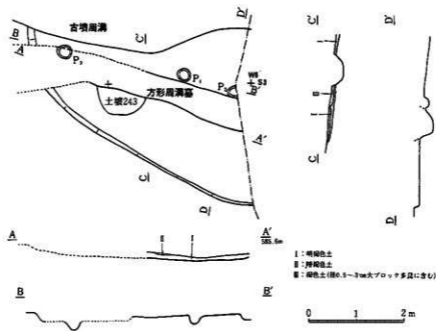
調査地北端に位置する。北・西側は区域外にかかり、南側3分の1程度を検出したのみである。切り合い関係は第63号住居址・土壌234に切られている。また古墳周溝に上部を破壊されている。平面形は楕円あるいは隅丸方形を呈すると思われるが、はっきりしたのは南東コーナーのみで、他は調査区外や攪乱部にかかり確認することはできなかった。このため規模は明らかでない。主軸方向はN-10°-Eを示す。壁は上部が破壊され僅かに残る数cmのみが立ち上がる。壁・床面ともに暗褐色砂質土中に掘り込まれ、軟弱であった。床面にはゆるやかな起伏を持つ。覆土は黄褐色ブロックが混入する暗褐~黒褐色土である。

遺物は少量である。壘1点があるほかはいずれも小破片である。遺物よりみて弥生時代中期後半に属する。

第63号住居址

北端に位置する。第59号住居址を切り、古墳周溝に床まで破壊されている。周溝の底面検出の際にビットと地床炉が認められ、本址の存在が明らかになった。炉(40×40×5cm)は奥壁寄りに作られると考えられ、P₃・P₄は主柱穴の可能性もある。

遺物は皆無であった。本址の時期は不明である。

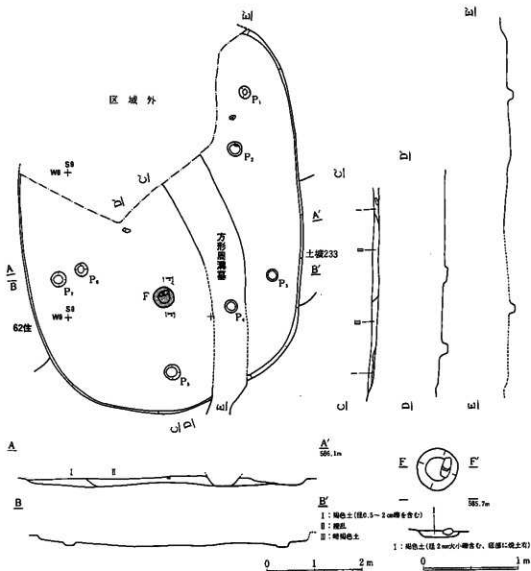


第21図 第60号住居址

第60号住居址

本址は調査区北寄り東際に位置する。方形周溝墓、古墳周溝、土壌243に切られ、その順序は本址→土壌→方形周溝墓→古墳となる。東側は昨年度調査区へ延びるが昨年18・20住調査時には本址の確認はできなかった(本址が古いと推定)。検出できたのは全体の5分の1程度と推定するが、規模・平面形等は不明である。壁高は5 cm程を残すのみで立ち上がりは緩やかなものとする。覆土は褐色を呈し、下層へ漸移的に黄褐色ブロックを増す。床は黄褐色土をそれとしたが、極めて不明瞭で、堅さはなく北へ緩やかに傾斜する。ピットは $P_1 \sim P_3$ を検出したが P_2 は半分が調査区域外となる。また P_3 は方形周溝墓の周溝下より検出され、規模は $32 \times 28 \times 20$ cmで柱穴の可能性を考える。炉は検出範囲内に確認することはできなかった。

遺物は床面中央部から甕1点が出土している。本址の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

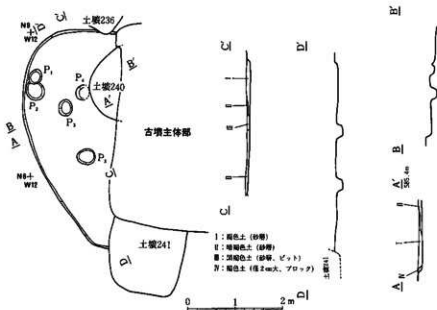


第22図 第61号住居址

第61号住居址

本址は調査区北に位置し、第62号住居址、土壙233を切り、方形周溝墓に切られる。西側の一部では周溝下に床を残す。南東側はプランが不明瞭であったが、S-80°-Wを示す9.5×6.0mの楕円形を呈すものと推定する。北東部4分の1程が調査区域外へ延びる。覆土は褐色を呈し、中央部には攪乱がみられるが、黄褐色を呈す堅緻な床面を残している。壁高は10cmに満たず、壁はごく緩やかに立ち上がる。ピットはP₁~P₇までを検出し、その規模は24×24cm~26×36cmと小さく浅いが、P₁・P₂・P₃・P₄・P₅・P₆・P₇を柱穴と想定した。入口は東側に設けられていたものと思われ、奥壁柱穴間に緑石をもつ地床伊を検出し、その覆土中には焼土を確認した。

遺物は少ない。床面より壺・甕が1点ずつ出土した。本址は弥生時代後期に属する。



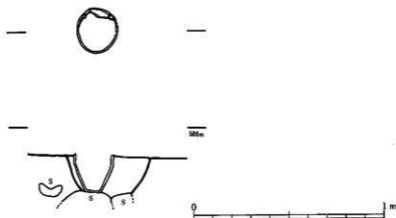
第23図 第64号住居址

第64号住居址

本址は、調査区域の北寄り、古墳主体部の西に位置する堅穴住居址である。他の遺構との関係は土層240・241・236に切られ、57住を切っている。古墳主体部に東半分を切られている。主軸方向は、住居の大部分を失っているために、明らかにすることはできないが、北西に軸をとると思われる。プランは楕円形を呈すると推定される。

壁高は5 cm程度しか残っておらず、壁は基底部を残すのみで、立ち上がりがよくわからず、検出は非常に困難であった。覆土は浅く、褐色土～黒褐色土が堆積していた。床面は黄褐色土の砂層の上に構築していたために、軟弱であり残存状態は悪い。南の方が2～3 cm高くなっている。ピットは計5本検出された。P₃とP₅を主柱穴と考えたいが、P₃の位置に多少、疑問が残る。他のピットは10cm程度の深さで主柱穴とするには、無理がある。炉についてはかなり精査したが、確認することはできなかった。

遺物は覆土中から、土器が少量出土し、本址の時期は、弥生時代後期と推定される。

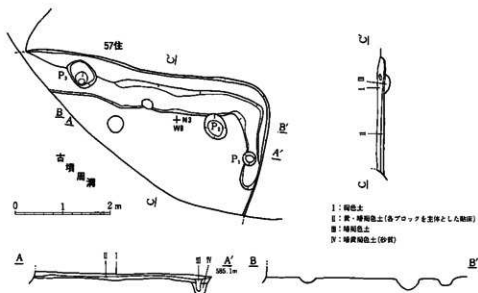


第24図 第65号住炉址

第65号住居址

畑の耕作による削平によって、すでに床がとばされていた。埋甕炉が確認されたため、堅穴住居址とした。床は、埋甕炉の周辺に少し残すのみで、プラン、規模は全く不明である。埋甕炉は、直径約45cmの円形の掘り方の中に、甕の胴部以下を埋設している。掘り方の底に礫があり、これらは、人為的に埋めて炉の底面としたものとは考えられず、偶然、掘っているうちに露出した礫を底面として活用したものであろう。

本址の時期は、炉体土器をもって、弥生時代中期末と推定される。



第25図 第66号住居址

第66号住居址

調査区北に位置する。第57号住居址に貼られ、古墳周溝に大半を切られている。主軸はN-80°-Wを示し、5.5×2.5m以上の隅丸長方形プランをもつ住居址である。本址床面のわずか5～8cm上に第57号住居址の床面がある。覆土は褐色土が薄く堆積している。壁は僅かに残存するが、立ちあがりは不明である。黄褐色砂質土中に掘り込まれ、黄・暗褐色土の各ブロックを主体とした床が4～8cmの厚さで貼られている。このため床面は平埤で堅版であった。ピットはP₁～P₃が検出されたが、P₂・P₃が主柱穴と考えられる。P₂は54×42×25cmの楕円形、P₃は上部が62×50×10cmの楕円形、下部が28×28×20cmの円形の2段掘りからなっている。ピットの覆土は暗褐色土であった。

貼床を剥いだ段階で北壁～東壁北側に周溝が検出された。幅は50cmを測り断面皿形に15cm程掘り込まれている。古墳周溝に大半を切られている為の本址の周溝がどこまで延びるかは知り得ない。かつて周溝としていたものを埋めたと考えられる。

遺物は微量の土器片のみである。遺物より見て、本址は弥生時代中期後半に属する。

住居址一覧表

住居 No.	図 No.	主軸	平面形	伊位置	伊形・型・規模	所属時期	備考
21	3	N-83°-E	楕円形 660×(410)			中期末	22住、第7、土壇245に切られる。 古墳墳丘下にある。
22	4	N-75°-E	楕円形			後期	21住を切る。古墳主体部に切られる。 古墳墳丘下に存在。
36	5	N-25°-W	隅丸長方形 500×370			中期後半	55住に貼られる。
39	6	N-80°-E	700×620			中期末～ 後期前半	床2段。 土壇69・72・74に切られる。
40	7	N-0°	隅丸方形 490×470		北壁にコナド	古墳前期	46住を切る。
45	8	N-15°-E	楕円形 580×(250以上400)			中期後半	東平を削平。
46	7	N-10°-E	長方形 ?			不明	
47	9	N-55°-W	隅丸方形 480×(480)		東壁にコナド	古墳前期	48住を切る。
48	10	N-75°-W	楕円形 540×(450)	中央	地床伊、楕円 50×35	中期後半	土壇202に貼られる。土壇208に切られる。 47住に切られる。
49							
50	11	S-70°-W	隅丸長方形 (350以上)×400	柱間	壇塚伊	後期	東平削平。 伊は空口縁一帯部を埋める。
51	12	N-75°-W	楕円形 720×510			中期末	土壇201・227に切られる。 ほとんど削平。
52	13	N-80°-E	楕円形? (350以上)×440			後期	方形周溝墓に切られる。 東平削平。
53	14	N-85°-W	隅丸長方形 560×460		地床伊、円形 40×35	後期	方形周溝墓に北東部を破壊される。
54	15	N-17°-E	隅丸長方形 390×(180以上)			中期後半	
55	16	N-55°-E	楕円形 520×(800以上)			中期末	36住を貼る。 覆土中に礎石
56	17	N-55°-E	隅丸長方形 600×?			不明	西平削平。
57	18	N-55°-W	楕円形 730×(400)	柱穴間	地床伊、楕円形 105×55	後期前半	66住を貼る。古墳周溝に切られる。 墳丘下に周溝あり。
58	19	N-50°-W	長方形 (400以上)×?		地床伊、円形 40×40	後期	古墳周溝に切られる。 東西側壁下に段あり。
59	20	N-10°-E	楕円形? (110以上)×280			中期後半	土壇234に切られる。 古墳周溝に上部を破壊される。
60	21	N-65°-W	楕円形 (600以上)			中期後半	方形周溝墓、土壇243、古墳周溝に切られる。 東部は削平。
61	22	S-80°-W	楕円形 (950)×600	柱間	緑石地床伊、円形 45×45	後期	62住を切る。方形周溝墓に上部を破壊される。 土壇233を切る。
62	13					縄文中期	西側一部分のみ残存 61住に切られる。
63	20				地床伊 (40以上)×35	不明	59住に切られる。 古墳周溝に床まで破壊される。
64	23		楕円形			後期	土壇240・241・236に切られる。 古墳主体部に切られる。57住を切る。
65	24				伊壁の入り 壇塚伊	中期末	覆土上半以下正位に埋納。
66	25	N-80°-W	隅丸長方形 (550以上)×(250以上)			中期後半	57住に貼られる。古墳周溝に切られ、床面 下に周溝あり。

2. 土墳（第26～28図）

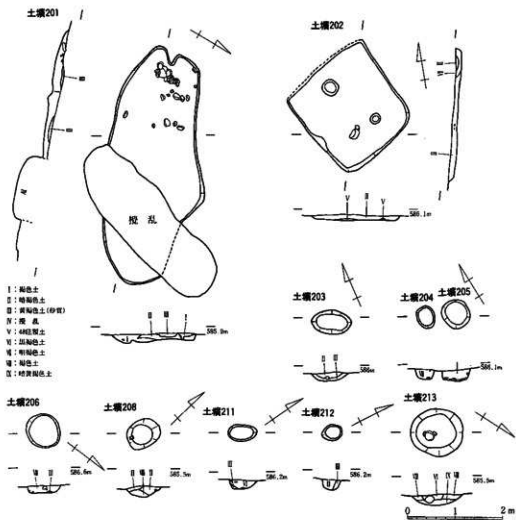
本遺跡では、住居に伴うピット以外のものをすべて土墳として扱った。今回の二次調査で検出された土墳は、土墳201～247の34基である。このうち土墳207・209・210・216～222・235・242・243は欠番である。分布をみると、古墳の周囲、中央北寄りの第51号住居址付近、中央西側第48号住居址の南に集中している。

規模は最少20×20cm（土墳223）から最大で485×220cm（土墳201）までである。便宜的に長径を50cm単位でまとめると、長径50cm以下は10基、51～100cmは13基、101cm以上は11基を数える。平面形態は円形、楕円形、及びその不整形が大半を占めているが、土墳202・226・241は方形、土墳236は不整形を呈す。平面形態と規模との関連は、長径50cm以下のものは、円形が圧倒的に多く、51～100cm以下では、楕円形が多く円形がそれに続く。100cmを超えるものは楕円形と方形である。断面形については、検出面が低く上部が削平されているものもあるが、台形が最も多く、皿形、半円形が続く。

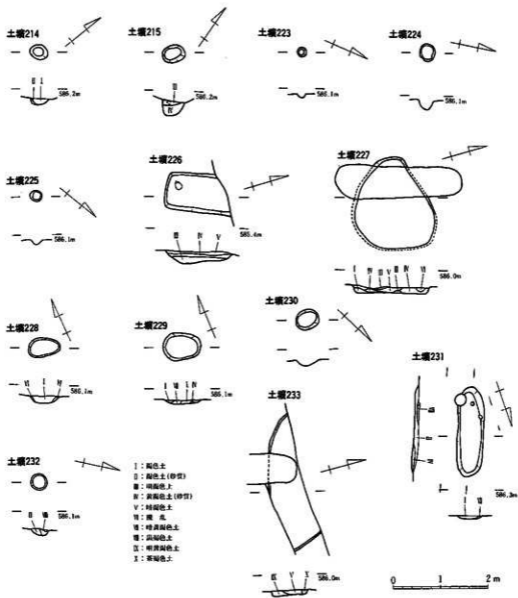
次に特徴的であった土墳について簡単に述べたい。土墳226は調査地北部に位置し、古墳の主体部に切られる。長軸方向はN-24°-E、規模は(135)×80cmを測り、長方形プランを推定した。断面は皿形で、30cm程掘りこまれている。覆土は明褐色土・砂質黄褐色土・暗褐色土の順で堆積している。土墳241は土墳226の西2.4mにあり、第64号住居址を切る。北側を古墳主体部に切られる為、プランは明らかでないが、方形であろう。規模は、160×(145)cmを測る。覆土は黒褐色土と褐色土で、いずれも礫を含む。側面はなだらかに立ちあがっている。土墳231は中央のやや北寄りに位置し、第53号住居址を切っている。185×50cmの楕円形を呈し、N-20°-Eに長軸をとる。断面は皿形で、10cm程掘りこまれている。覆土は砂質黄褐色土、黒褐色土、砂質褐色土の順に堆積している。土墳240は土墳241の北2.6mに位置する。第64号住居址に東側を切られるが、1.5m程の方形プランが想定できる。断面を見ると二段に掘りこまれ、覆土上層には礫が多量に混入する。尚土墳側面の一部は焼けていた。以上土墳226・241・231・240について概観してみたが、第一次発掘調査において、古墳の南に隣接して検出された土墳25・102に位置・規模・プラン等が類似する。土墳25は、長軸N-2°-W、210×70cmの隅丸長方形プランで、覆土～床面にかけて多量の礫を含んでいた。また土墳102は、長軸N-71°-W、90×70cmのプランで、土器棺と思われる大形の壺が出土し、壺から弥生時代中期後半～後期前半のものとして推定される。従ってこれらの大規模な土墳は、墓址の可能性を考えねばならないと思う。尚、同様の性格を持つと思われるものに、土墳201・233・227がある。今回の調査では、土墳に伴う遺物はないが、他遺構との切り合い関係等から、本遺跡の土墳群の形成は弥生時代中期後半～後期前半以降と推定される。

土壌一覧表

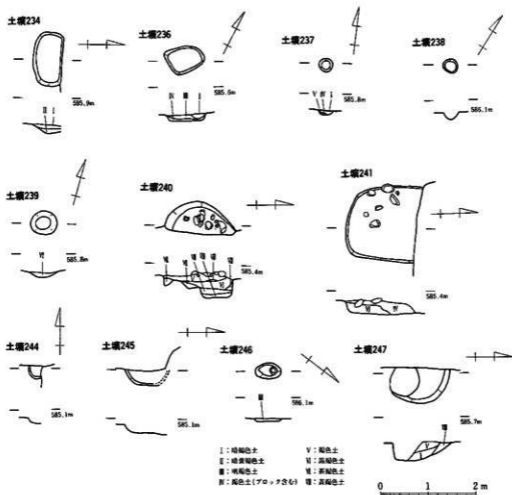
No.	図	位置	平面形	断面形	平面規模(cm)	深さ(m)	備考
201	26	S18W9	不整楕円形	皿形	485×220	25	51住を切る。
202	26	S30W33	方形	台形	(270)×260	15	48住を切る。
203	26	S21W21	楕円形	皿形	85×30	15	
204	26	S24W21	円形	台形	45×40	20	
205	26	S24W21	"	"	60×60	20	
206	26	S24W24	"	"	65×65	15	
208	26	S33W33	楕円形	"	65×60	25	48住を切る。
211	26	S33W36	"	"	60×30	20	
212	26	S33W36	"	深丸形	45×35	25	
213	26	S36W33	円形	皿形	110×100	20	
214	27	S33W33	楕円形	半円形	40×30	10	
215	27	S33W33	"	深丸形	50×40	30	
223	27	S45W39	円形	半円形	20×20	5	
224	27	S45W39	"	深丸形	35×30	20	
225	27	S48W39	"	半円形	25×20	10	
226	27	N6W6	方形	皿形	(135)×80	30	
227	27	S15W9	不整楕円形	台形	190×175	15	51住を切る。
228	27	S39W27	"	皿形	65×40	10	
229	27	S39W27	楕円形	"	80×60	10	
230	27	S57W42	"	"	50×45	15	
231	27	S9W18	"	"	185×50	10	
232	27	S21W6	円形	半円形	35×35	10	
233	27	S15W6	不整楕円形	台形	(230)×(75)	10	61住に切られる。
234	28	N12W15	方形	皿形	110×60	20	59住を切る。
236	28	N12W12	不整方形	台形	75×60	15	64住を切る。
237	28	N12W9	円形	半円形	30×30	10	
238	28	N9W9	"	"	30×30	15	
239	28	N9W9	"	皿形	55×50	10	
240	28	N9W9	楕円形	楕円形	150×(65)	55	64住を切る。
241	28	N6W9	方形	台形	160×(145)	30	"
244	28	N12W6	楕円形	"	(30)×(25)	15	
245	28	N15W6	"	"	90×(30)	20	21住を切る。
246	28	N9W6	"	"	60×35	5	
247	28	N9W12	"	"	120×(75)	40	



第26图 土坑 (1)



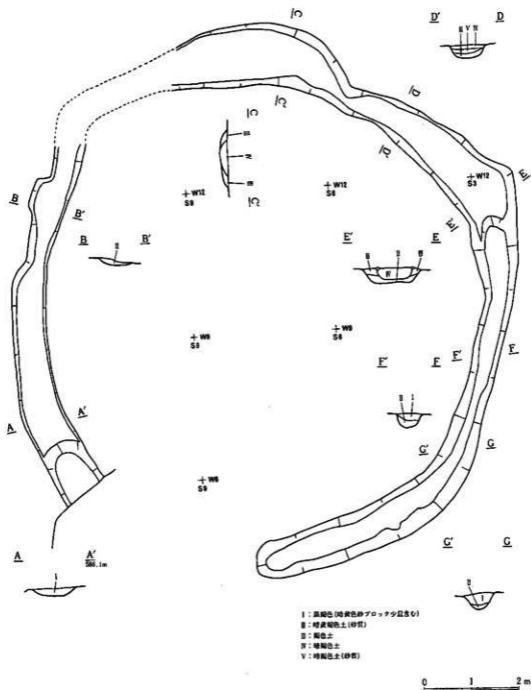
第27圖 土坑 (2)



第28図 土壇 (3)

3. 方形周溝墓

調査区域の中央のやや北寄りに位置し、第52・53・60・61号住居を切っている。周辺のどの遺構よりも新しい。規模は東西9.2m×南北8.0mであり、そのプランは隅丸方形をとると思われるが、周溝の1辺がコーナーらしきものをもつ複雑な形をしている。主軸をN-63°-Wにとる。主軸方向の東に陸橋が存在するが、陸橋部の両側の周溝は、削平のために確認することができなかった。主体部も削平が著しく検出できなかった。周溝の断面形は、半円形から台形を呈し、深さは、南半分が浅く、北半分が深い。深いところで約30cm、浅いところで約14cmである。幅は1.2~0.5mで、一様ではない。底面は比較的平坦であり、覆土からは、周溝が自然に埋没した状況が観察された。周溝の西側の部分は東側より最大値で約1.1m高い。平坦な地山が他にあるのに、周溝を構築するにあたって、傾斜地を選んだのが疑問に残る。



第29図 方形周溝墓

遺物は周溝内から若干ではあるが土師器が出土している。本址の時期は、他の遺構との切り合い関係、出土した土器などからみて、古墳時代前期と推定される。

4. 古墳(第30~33図)

本年度は西半部の調査を行った。その結果北部を除き、古墳のほぼ全容が明らかになった。

1立地 東西に傾斜する緩斜面に構築される。

2墳形及び墳丘 基底部での直径18.3m(東西)の円墳である(第30図)。盛土は西側で50cmの厚さを測る。

3周溝 西半部では周溝は2段に落ち込み、セクション観察により拡張が行われていることが判明した。東側では削平を受けていることもあり確認されなかったが(昨年度調査)、斜面の下方に位置しており、大きな改変はしていないと考えた方がよからう。

①第1次周溝 西部4.5m・南部3.3m・東部2.5mの幅を測る。(残存部での計測)削平のため深さは不明であるが、傾斜面上方に当たる西側では幅も大きく、より深かったと思われる。床面も地形の傾斜に合わせており、東西で50cmの比高差を有する。

②第2次周溝 第1次周溝の埋没過程において、西側を中心に周溝の拡張が行われる。床面は第1次より約35cm高い(西側)。幅は東側では旧来(削平により拡張の有無不明)であるが、南側4.5m西側で6m以上に広げている。なお、底面には拳大~人頭大の礎が多く見られたが、検出状況からは人工物とは判断されなかった。

4墳丘内埋葬施設 昨年の調査では東西に長い長大な墓壇中に、南北に主軸をおく6体の棺を検出したが、本年度の調査によりその全容が明らかになった。今回得られた所見をもとに、あらためて各主体について検討する。(第31図)

①墓壇 墳丘の大部分を占める長大な掘り方である。長軸10.8m(東西)・短軸5.4m(南北)を測り、墳丘中央に設けられる。これは各主体の墓壇の重複の結果ではなく、築造時に設けられたものと考えられる。

②第1主体 墓壇東壁より2.3m西に位置する。長347cm・幅49cm・主軸方向N-8°-Eの狭長なプランである。棺床は水平で、遺物もない。従って埋葬頭位は不明である。

③第2主体 第1主体の西に23cmの間隔において構築される。長350cm・幅52cm・主軸方向S-9°-Wの木棺掘り方を有する。棺床は水平で、南側小口幅は北側より若干大きい。頭位は南と推定される。

④第3主体 第2主体に隣接し、主軸・長さをそろえて構築される。長378cm・幅63cm・主軸方向S-12°-Wで、南側小口幅のやや大きい木棺掘り方を有する。棺床は南側がやや高く、頭位方向と推定される。遺物は、南端近く及び北小口部から3点の鉄製品が出土した。(形態不明)

尚、第2・3主体は墳丘のほぼ中央に位置する。

⑤第4主体 第3主体の西に構築され、次の第5主体と南部を接して存在する。長378cm・幅40cmの木棺掘り方はN-13°-Eに主軸を振る。北側より不明鉄製品が2点出土する。小口幅よりみて、北に頭位をおくものと推定される。

⑥第5主体 第4主体の隅に、棺床のレベルをそろえて構築される。木棺掘り方は長385cm・幅50cmで、N-8°-Eに主軸をとる。遺物の出土はない。頭位は北と推定される。

以上の主体は第1次報告では同時埋葬と考えたが、検出状況・掘り方形態・棺床レベル・主軸等から判断すると、第2・3主体、第4・5主体は共通性が多く、同時埋葬の可能性がある。従って5主体は第1、第2・3、第4・5の3群に分けられよう。それぞれの群の時間差については、削平調査時の誤認により確認できなかったが一般的な事例から言って同時性を強調する理由はない。むしろ次の第6主体と同様、時間差をおく方が自然であろう。

⑦第6主体 第5主体の西辺を切って構築される。本主体は墳丘面で墓壇切り合いが確認できた。

墓壇は長軸4.4m・幅2.7mで、北側の小口幅を大きくとる。すり鉢状に掘り凹めた床面には長368cm・幅65cm・主軸方向N-8°-Eの木棺掘り方を設ける。遺物は西壁南寄より刀子状の鉄製品が出土した。埋葬頭位は北である。本主体は最も新しく埋葬が行われたものである。

⑧第7主体 今次調査で確認した。第6主体の西、つまり西端に位置する。墓壇は、東側では第6主体に切られて不明、西は棺より1.8m、南北は4.3mを測る。棺掘り方は長408cm・幅80cm・主軸方向N-4°-Eである。木棺の痕跡は明瞭に観察され、375×60cmの規模を測る。棺掘り方内は棺設置時に整地する。遺物等の出土はない。尚棺両小口に接する墓壇壁には奥行15cm程の掘り込みがされる。棺設置作業に関わるものと推定されるが、不明である。

以上整理をすると、長大な墓壇内には④第1主体⑤第2・3主体⑥第4・5主体⑦第6主体⑧第7主体の6グループがあり、それぞれは第6主体や第7主体のように墓壇をもち、時間差を置いて構築されると考えた方が妥当であるということになる。しかし、長大な墓壇はそれとして別に存在しており、この墓壇と各グループの関係を捉える必要がある。今次調査では詳細な断面観察を行った結果、第7主体付近において長大な墓壇と各墓壇の関係を確認し得た。

第7主体の墓壇底は地山面になく、1度掘られた後埋められた埋土中に存在している。これは他の主体にも見られ、棺設置以前には長大な墓壇が既に存在していた事になる。

再度整理をすると、墳丘築成後に多数の棺設置を意図して長大な墓壇を掘り、盛土とは一見して異なる黄褐色ブロックを多量に混入した土で埋め戻す。次に④~⑧のうち、⑥又は⑦の埋葬を行い、順時追葬する。最終的に第6主体が埋葬されると考えられる。

5周溝内埋葬施設 昨年検出された周溝内主体1に加え、南西部に周溝内主体2を検出した。

①周溝内主体1 東部周溝内、正確には墳丘を切り込んで構築される。本主体は位置・主軸等墳丘内埋葬施設と密接な関係にあり、両者にはあまり時間差は考えられない。

②周溝内主体2 南西部周溝、第2次底面より掘り込まれる。長258cm・幅84cm・深さ40cmを測る木棺掘り方を有する。遺物は、中央南寄より刀子状鉄製品が、棺床より数cm浮いて出土した。頭位は棺床レベル、小口幅からみれば南東になろう。尚本主体東側の周溝壁には南北に走る掘り込みがあり、おそらく主体構築時に掘り込まれたものと推定される。マウンド等確認されないが、第32図

VI層は埋土として良いであろう。(第32図)

本埋葬施設は、第2次周溝より掘り込まれること、墳丘内埋葬施設とは位置・軸等異なる点に特色があり、他の埋葬施設との関係が希薄と言えよう。

6周溝内遺物出土状態(第33図) 昨年の調査では南東周溝底面より一括して供獻土器の出土があった。今次調査ではこの土器群の西方3mの地点を中心に、二重口縁壺等の一括土器群を検出した。土器類は未整理で詳細については触れられないが、土器群のおかれる底面は周囲よりやや低くなっており、東側の土器群と合せ、墓前祭祀の場として使用されたと考えられる。この場合各グループと墳丘内埋葬施設との関係を考えなければならないが、各主体の前後関係及び土器群の新旧が不明な現段階では、両者を確実に結びつけることはできない。位置的には西側の土器群は西寄の主体部に、東側の土器群は東寄の主体部に対応すると見ても可能ではある。

その他、北西部の底面にも壺を中心とした土器類が出土している。

第2次周溝底面には遺物は多く見られない。No.9は周溝内主体2の上部に、正位に立つ高坏脚部で、主体に伴う可能性がある。No.8は須恵器壺で、潰れた状態で出土している。

7まとめ 最後に古墳全体についてまとめておく。

本墳の墳丘内埋葬施設は先述のように、例を見ない特異なものであった。現時点で考えられる事は、当初より多埋葬を意図して造営された可能性が強いことである。長大な墓壇と、墳丘盛土と一見して異なる埋土は、全ての棺が並列に軸をそろえ、切り合う事なく埋葬が完了するための割付を容易にさせるための施設と理解できないだろうか。棺を置く空間に対する特別の配慮もあったのかもしれない。

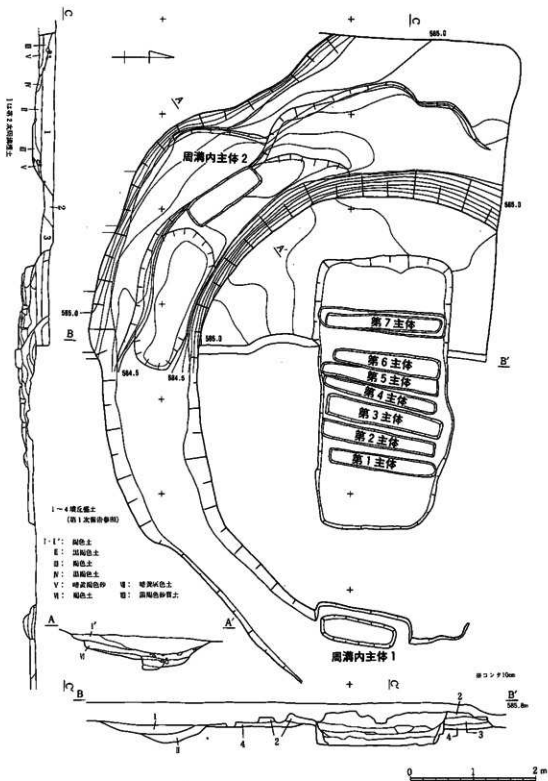
㊸～㊿の前後関係については不明な点が多いが、位置・規模から推して㊸グループが最初の埋葬となろう。続いて位置・切り合い等より㊿→㊾・㊽→㊼の変遷が考えられる。㊸・㊿については両者とも片方の棺が長さ・幅ともやや大きく、2棺の間に若干の格差が認められる。通例から見れば夫婦合葬の可能性が考えられよう。

2時期にわたる周溝の使用は、本墳が比較的長期に渡って営まれた事を示している。土器も詳細な検討を待たねばならないが、明らかに時期が異なるようである。主体部との時間関係も今後の解明課題であろう。

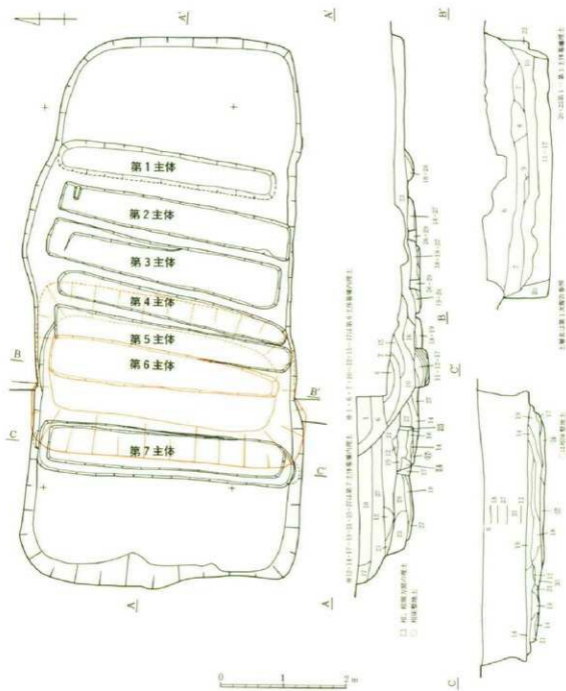
本墳の築造時期については、第1次報告にて5世紀後半とした。最終的に古墳の使用が終了するのは第2次周溝の設営後と考えられるが、先述の如く時期の特定は今後の課題である。

古墳の性格については類例を知らず、詳細な整理・検討が出来ないので不明な点が多い。大人と思われる埋葬のみで構成される墳丘内埋葬のあり方は、一般の家族墓的な古墳とも性格が異なり、古墳としての認定の問題をも含め今後の解明課題である。

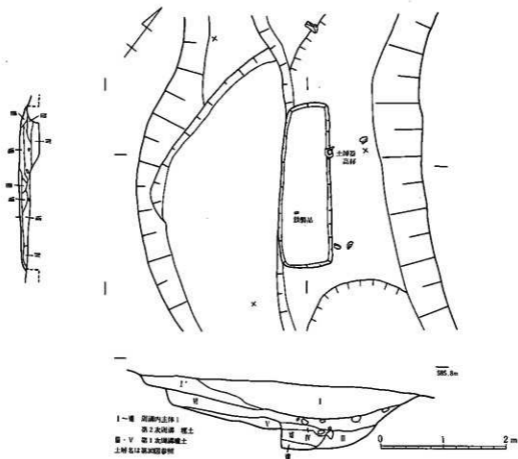
尚、周溝内埋葬例は、県内では初見であり、今後類例の増加を待って検討される必要があろう。



第30図 古墳墳丘平面図



第31图 古墳主体部平面图

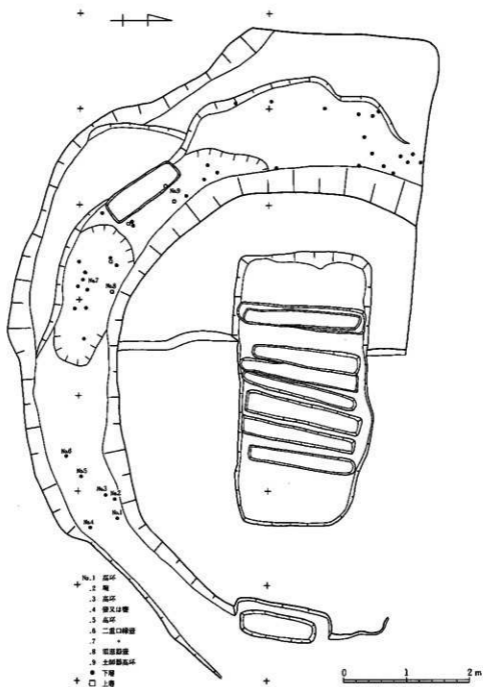


第32図 古墳周溝内主体2平面図・断面図

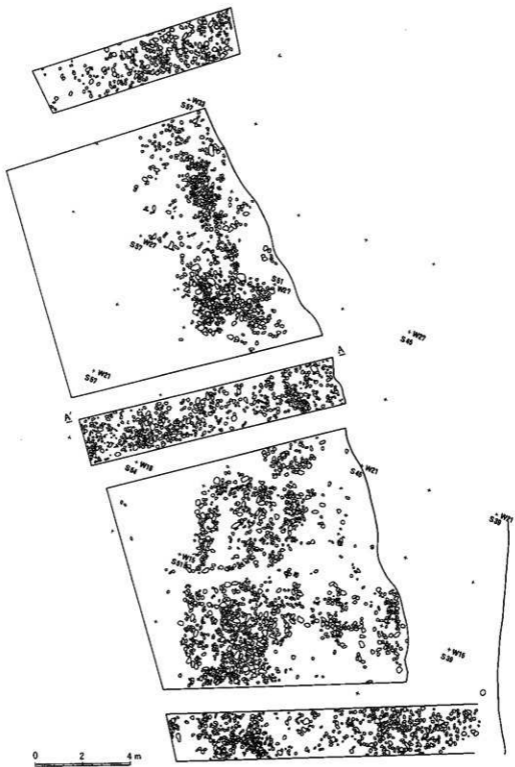
5. 谷状地形

調査区南西際にはほぼ北東から南西（以下これを東西方向とする）に延びる地形で、昨年度調査地（I区）にまたがり確認した。今回調査を行ったのは幅9～11m、長さ30m程で、昨年度分と合わせると幅11～15m、長さは75mに及ぶ。昨年度は50cm幅のトレンチ16本を設定し調査を行なったが、今回は2m幅のトレンチ3本を入れ、遺物・礫の集中する層を確認し、その深さまで全域にわたり調査を行なった。

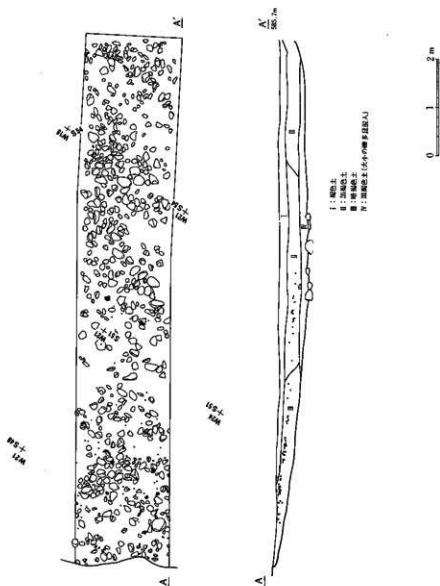
本址北側には砂利質黄褐色土中に、第56・60号住居址があるが、耕作による攪乱を受け全容を明らかにできなかったため、切り合い関係は不明である。一方南側は昨年度調査の第4・16号住居址に切られる。深さは最大60cmを測り、覆土は黒褐色もしくは暗褐色を呈す。断面（第53図）を観察すると、底は北側では緩やかな傾斜を示すが、南側は僅かに確認した傾斜と、昨年度の調査結果より、北側よりは急な傾斜を成すものと考えられる。地山は大礫を多量に含む細砂で、古くは流路であっ



第33図 古墳陶溝内遺物分布



第34圖 谷状地形 (I)



第35図 谷状地形(2)

たことを窺わせる。

遺物は第III層下層部より僅かではあるが、縄文時代中期後半の土器を確認し、同上層部には弥生時代中期後半を中心とした土器片が多量に出土した。又これらの遺物とともに夥しい数の石が黒褐色土中にみられ、弥生時代の土器と重なるものは4 m程の幅の直線を成し、人為的な感じをうける。

本址は当初流路として谷状を成したが、第4・16号住居址等が集落を形成した時期には既に流路としての性格を失っていた。遺物・石の集中する層は砂礫を全く含まない点からも、意図的か否かは不明だが、人為的なものであることは確実である。

第3章 調査のまとめ

今回の調査の終了により、昨年度設定した調査予定範囲のほとんどにあたる6300m²を調査し終えたことになる。前回と重複するところもあるが、この時点で考えられることなどをいくつか列記して今回のまとめとしたい。

1. 遺構について

別添付図は第1次と今回の成果を合成した全体図である。調査地の中央部をほぼ東西方向に走る谷状の地形を挟んで両側に弥生時代の集落址が展開している姿が明らかになっている。発見された遺構は総数で、竪穴住居址63、古墳1、方形周溝墓1、土壌34であった。時期別にみると竪穴住居址は63棟のうち弥生時代60、古墳時代3、古墳と方形周溝墓は古墳時代のものであり、弥生時代の竪穴住居址のみについてみても、遺物整理が終了していないので不確定だが、中期後半19、中期末11、後期前半14、後期末1に分けられる（残り16棟分は不明または未確認）。

①弥生時代の竪穴住居址について

個々の住居址の特徴は平面形と炉址の形態にある。平面形は、楕円形と隅丸長方形（方形）を基調としてそれぞれに若干歪みがある。代表的な例として、楕円形プランは第5号住居址（一次調査後期前半）、第61号住居址（二次調査：後期前半）が、隅丸長方形（方形）プランは第1・3・7・12号住居址（いずれも一次：1・12が中期後半、3・7が後期前半）、第53号住居址（二次：後期前半）などがあげられる。これらを時期的にみた場合、中期後半では比較的隅丸長方形が多く、次の中期末になるとこんどは楕円形が増えるという一定の傾向があるようだが、後期になるとさまざまになり、あまり統一性がないようにみえる。遺物の整理が進んで更に細かい時期区分ができれば、それに対応する様に平面形の各時期ごとの規格性が現れてくるのかもしれない。ちなみに、松本市他の弥生時代竪穴住居址の例を参考にすると、まず松本市あがた遺跡で中期末の良好な集落址が調査されているが、いずれも楕円形プラン、塩尻市上木戸遺跡⁽¹⁾の後期後半の集落ではすべて隅丸長方形あるいは隅丸方形、松本市三の宮遺跡の後期後半～末の集落でも上木戸と同様という結果になっている。これらから推察すると、中期末から後期後半へ向い、楕円形プランが隅丸長方形プランへ変っていったことが窺われ、当遺跡の後期の住居址はこの変化の過程を探る好資料とも言えよう。中期末以前の類例は適当のものが周辺地域では見当たらないが、当遺跡の中期後半は一定の傾向（即ち隅丸方形）を示しているので、上記のことをまとめると当遺跡を含む松本平周辺では弥生中期中後半から後期にかけて竪穴住居址の平面形は、隅丸方形（長方形）→楕円形→隅丸方形（長方形）という形で推移することが予想される。

次に炉の位置形態についてであるが、位置については第一次調査の報告で、A：奥壁-B間、B：奥壁寄柱穴間、C：B-D間、D：床面中央（柱穴間）の4類に分けて一覧表を作成した。今回は

削平されたり、他遺構に切られたりした住居址が多く、炉の検出できないことが多かったのでこの項目ははずしたが、基本的にはこの視点に立って考えたい。炉の形態のわかる典型的なものは、第1号住居址(D—埋甕炉)、第4号住居址(D—埋甕炉)、第5号住居址(F₁:B—緑石地床炉)、等、一次調査では多数にのぼり、二次では、第48号住居址(D—地床炉)、第50号住居址(B—埋甕炉)、第61号住居址(B—緑石地床炉)等がある。位置について全体的にみると中期後半にDが、また後期にBが多く、住居中央から柱穴間へと移っていく傾向があることがわかる。形態については、炉・緑石のあるもの(第61号住居址)、石囲いのあるもの(第6号住居址F₁)、埋甕のもの(多数)がある。特に埋甕のものは、壺を利用したもの(第1・6・19・26・65号住)と壺を利用したもの(第4・36・50号住)の違いがあるが今のところ時代的な規制は認められない。

②遺構の配置について

住居址には弥生時代各期と古墳時代のものがあるが、時代によって占地する場所が異なる傾向がみられる。弥生時代は中期後半から後期前半までの、調査で主体をなす時期のものは地区内全体に分布する(第26号住と第54号住の間の空白地帯は削平によってできたもの)が、後期後半は第17号住居址が1棟のみ南西隅に顔を出しており、この時期のものが以南に分布している可能性がある。古墳時代のものはいずれも後期に属するが、谷状地形以北に3棟集中しており、更に北方の調査地外へ分布が続いていくのであろう。

古墳と方形周溝墓は調査地北西部に南北に並ぶように発見されたが、調査中の所見からは方形周溝墓の方が時代的に古い。それらが切り合うことなく並列するのは古墳造営時に方形周溝墓の存在が意識されていたためなのだろうか。出土遺物の分析を通じて、今後もう少し考えてみたい問題である。

2. 弥生時代の遺跡について

近年まで松本平では弥生時代の調査が少なく、資料の集積と様相の解明が著しく遅れていた。特に弥生中期末の百瀬式のあり方、後期における千曲川水系と天竜川水系の2大文化圏の境界地域での様相等、全県レベルで問題が集中していたといっても過言ではない。この様な中で、松本市でもS59・60にあがた遺跡で中期後半～末の40棟余、S61に三の宮遺跡で後期後半の10数棟の竪穴住居の発見が相次ぎ、当遺跡の調査は其中で最大のものであった。いずれも遺物整理は未了だが、先の問題を解決できる内容をもつものとして期待されている。

今回の調査は第二次調査であり、昨年、未知の遺跡の規模に驚き消化不良をおこしながらなんとか切り抜けた経験を基に充分な体制で臨んだものであった。関係機関及びご協力戴いた方々に衷心より感謝申し上げ、更に今後のご指導をお願いしたい。

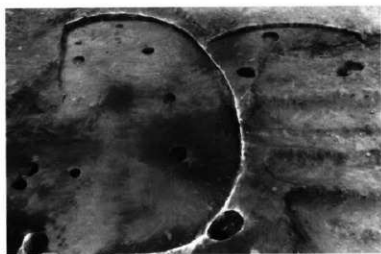


調査地近景（上：古墳周辺、下：谷状地形）

第1図版 調査地風景

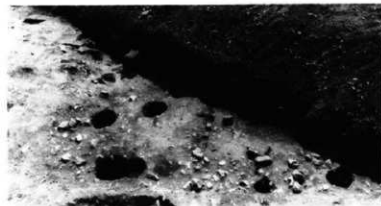


第21号住居址



第21号住居址(左)

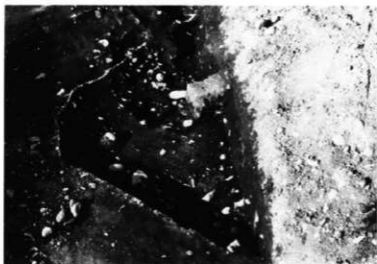
第22号住居址(右)



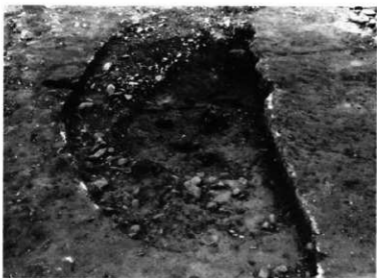
第40号住居址(奥)

第46号住居址(手前)

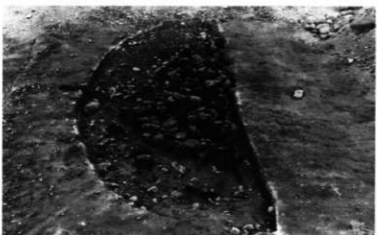
第2図版 住居址(1)



第40号住居址



第39号住居址

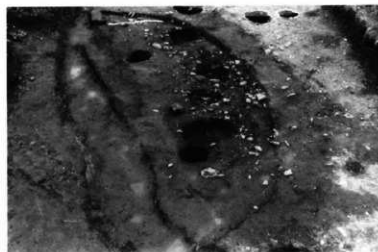


同上 住居内集石

第3图版 住居址(2)



第45号住居址



同上



第47号住居址

第4图版 住居址(3)



第47号住居址

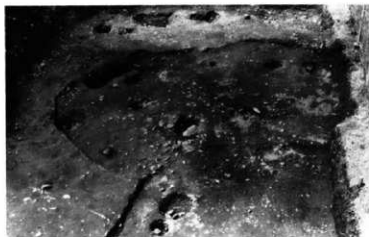


第51号住居址



第52号住居址

第5图版 住居址(4)



第48号住居址

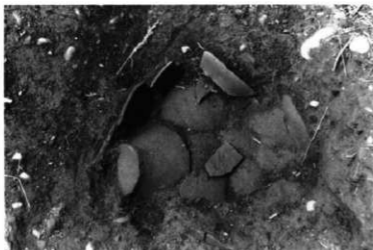


同上



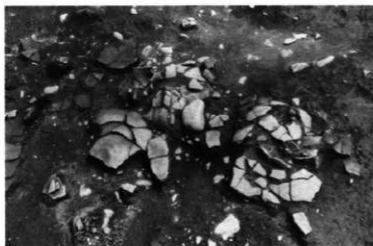
同上
砥石、石斧出土状態

第6圖版 住居址(5)



第48号住居址

土器出土状態



同上

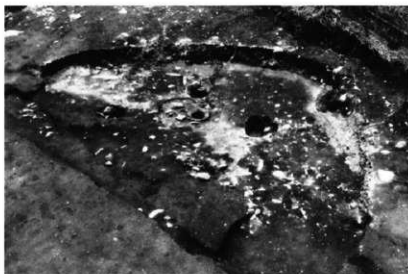


同上

第7図版 住居址(6)



第53号住居址



第50号住居址



第50号住居址

第8图版 住居址(7)



第50号住居址
遺物出土状態



第50号住居址
炉址



同上



第55号住居址



同上



同上
住居内集石

第10図版 住居址(9)



第56号住居址



第57号住居址



第66号住居址
(第57号住居址の床面下で検出)



第58号住居址
(手前は古墳周溝)

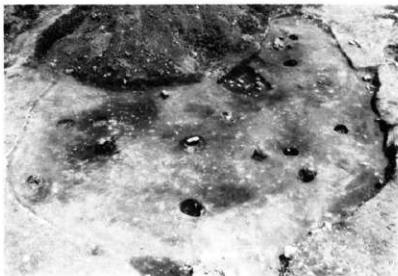


第59号住居址(右)
第63号住居址
(中央のビット部分)



第60号住居址
(中央溝は方形周溝墓)
(手前は古墳周溝)

第12図版 住居址(10)



第61号住居址

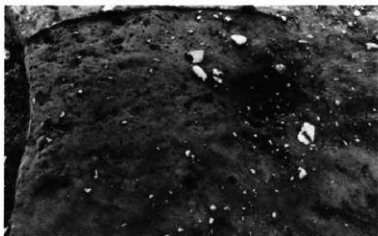


同上



同上炉

第13図版 住居址(2)



第62号住居址



第64号住居址

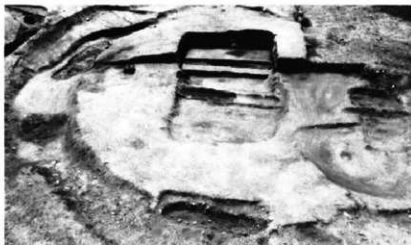
土坑241



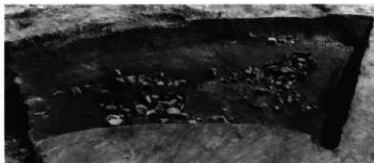
第65号住居址

炉址

第14图版 住居址(3)



古墳全形(東より)



第2次周溝底面
(周溝内主体2付近)



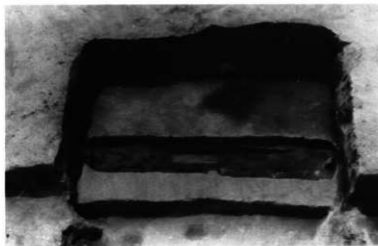
主体部全形(東より)



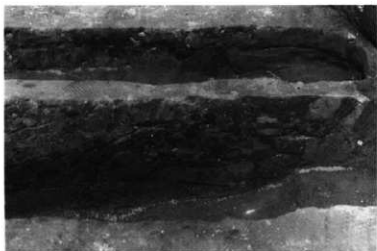
第7主体検出状況



第7主体墓壁セクション(南より)



第7主体全形(東より)



第7主体棺内セクション
(北側、最下層は棺床整地土)



第7主体棺小口部
(南側、壁のくぼみは意図的)



周溝内主体全景(南東より)

第17図版 古墳(3)



周溝内主体2(北より)



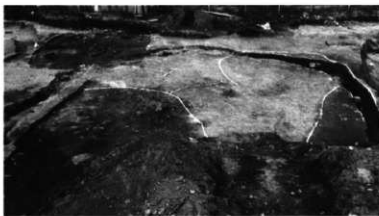
周溝内主体2(東より)



周溝内主体2断面



方形周溝墓
(奥は古墳)



方形周溝墓



第40・45～48号住居址
検出状態

第19図版 方形周溝墓



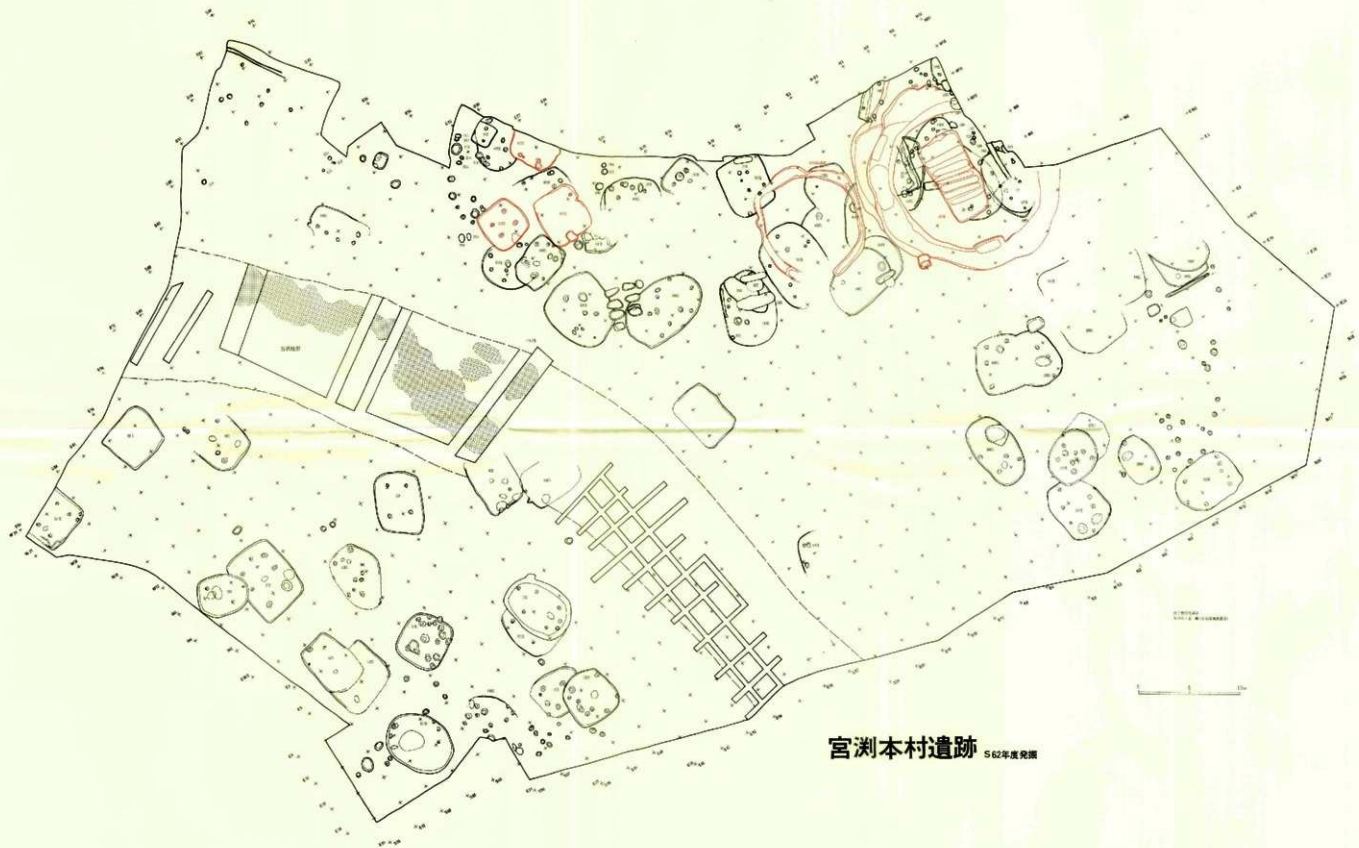
表土除去



遺構検出



住居址掘下付



宮渕本村遺跡 562年度発掘

松本市文化財調査報告No.52

松本市宮淵本村遺跡Ⅱ

昭和62年3月20日印刷

昭和62年3月31日発行

発行 松本市教育委員会

印刷 電算印刷株式会社
